

平成29年度 プロジェクト研究所研究実績報告書

平成30年5月31日

学 長 殿

代表者 上垣内 伸子

研 究 所 の 名 称	幼児教育研究所
設 置 年 限	平成25年4月1日～平成30年3月31日
1. 研究の取組状況	
<p>保育者養成カリキュラムの開発研究および授業研究として、平成29年度も前年度までに引き続き、平成25年度の幼児教育研究所設置から継続して取り組んでいるテーマを中心に、学生自身の自己成長感を保証する養成カリキュラムについて検討した。</p> <p>入学生の学習に向かう姿勢や意欲、学習に関わる知識・技能の獲得状況の変化を見据えて、現行のカリキュラムの妥当性、適切性について議論した。また、平成29年度は、平成31年度からの新たな教員養成課程が出され、更には、保育士養成課程の改訂についても12月に中間まとめが出されたことを受けて、幼稚園教諭養成課程と保育士養成課程のカリキュラムの再課程認定に向けて、保育者養成におけるコア・カリキュラムを踏まえた新たなカリキュラムについても議論した。特に、学科専任教員全員で取り組む「保育・教職実践演習」と、領域および保育内容の指導法に関する科目としてこれまで学科独自に開講してきたオムニバス科目「表現総論」について、有志教員が自分の専門領域からの取り組みのねらい及び内容、教授方法についてまとめたものを年報として作成し、教員間の授業内容に関するFDの土壌づくりを試みた。</p> <p>さらに、数名の教員は、関東ブロックが当番校となった平成29年度全国保育士養成協議会（平成29年9月、聖徳大学）の実行委員として、分科会の運営責任者、記録係の役割を担い、セミナー及び分科会運営に携わった。保養協が行っている保育実習のミニマムスタンダードの改訂版作成や、保育実習に関する厚労省委託研究にも参加し、新たな「保育所保育指針」および保育士養成課程の変更点を反映させた保育実習および実習指導のあり方について、他の養成校教員や保育現場の保育士と意見交換を行った。</p> <p>継続的取り組みとしては、以下の科目について、学生の実習記録やレポートなどの成果物を資料として効果についての検討を行った。</p> <p>①児童学演習：実習体験を通しての子ども理解・保育理解を図る初年次教育科目</p> <p>②幼児教育基礎実習：保育実践記録を活用したグループ・カンファレンスによる反省的保育者養成を目指す基礎的実習科目</p> <p>③保育方法：附属幼稚園と連携した具体的保育実践を通しての保育理解を目指す科目</p> <p>④保育・教職実践演習：保育者を目指す者としての自己課題の明確化と課題の改善に取り組む教職必修科目</p>	

2. 研究の成果・概要および公表実績・予定（年月日、開催場所、方法等）

1. 授業研究を特集した「幼児教育研究所年報第3号」の刊行

「平成29年度幼児教育研究所年報第3号」「Early Childhood Education Research Center Report 2017」、平成30年2月28日発行。

有志教員が各自の担当する科目について、保育の質の向上を目指す養成教育の教授内容・学習方法の工夫とその考察を年報にまとめた。対象となった科目は、音楽表現にかかわる科目群、「保育心理学」、「保育・教育相談」、「障害児保育」、「表現総論」、「保育・教職実践演習」である。特に、学科専任教員全員で取り組む「保育・教職実践演習」と、領域および保育内容の指導法に関する科目としてこれまで学科独自に開講してきたオムニバス科目「表現総論」では、異なる専門領域の教員が異なるアプローチで一つのテーマについて探求することが、受講する学生への良い刺激と、保育を総合的にとらえるまなざしの育成につながることを示唆された。その多様性が養成教育において効果的に発揮されるには、教員間のFDが重要であることも推測された。

この年報は、平成29年度の実習懇談会での発言も反映させ、毎年実習懇談会招待して意見交換を行っている本学科の実習協力幼稚園に送付した。

2. 学生自身の自己成長感を保証する養成カリキュラムについて検討（継続）

個々の科目の検討は、再課程認定と第3次教育体制改革会議に対応する議論とそれを反映しての書類作成、試案提出など、本学科の養成カリキュラム全体にかかわる取り組みに膨大なエネルギーを注がざるを得ず、データの分析と考察、研究成果発表までには至らなかった。引き続き取り組んでいきたい。いくつかの成果を以下に記す。

①児童学演習；幼児教育学科では以前から「地域で学ぶ」教育体制を展開しており、平成28年度に引き続き、保育や子どもの育ちを学ぶ機会を得ていることが確認できた。前期実習については、実習の様子を観察したり、園長との実習生の様子を確認したところ実習での学生の様子から、実習指導の中に心と体をほぐす試みや子どもと遊んでいる自分の姿のイメージ化に対する取り組みの必要性が読み取れた。事前指導としてどのように取り組むか平成30年度の課題として残された。

②保育方法；保育方法については、計4回、附属幼稚園の各学年のクラス担任および主事・園長の各教諭より、附属幼稚園での実際の保育実践について語ってもらう授業を行った。子どもたちの遊びをどう理解しているのか、担任として子どもたちに何を願っているのかについて、事前事後に大学の教員と附属の教諭との打ち合わせを行うことで、学生の保育理解が促されると考えた。また、この取り組みは3年目になるが、附属幼稚園の教諭も実践を振り返り、言語化する機会としてこの授業を位置づけることで、互恵的な学びが生まれていることが実感できているため、この授業の成果を整理していくことが今後の課題となる。

③保育・教職実践演習；年報に、シラバス策定の経緯とねらい、グループ学習の実践とその課題、それぞれの専門領域の特性を活かした取り組みについて掲載した。

3. 平成29年度全国保育士養成セミナー実行委員としての分科会運営

第9分科会「新指針を踏まえた保育養成教育の課題」では、新たな「保育所指針」の施行を踏まえて、今後の保育士養成教あり方や課題を、「保育の対象理解に関する科目」群展開から検討した。第12分科会「自己成長を促す保育実習指導と個別支援」では、2～4年のそれぞれの養成期間のなかで、学生自己長や保育現場での職能成長につながる保育実習及び指導、個別支援の有効な方法を検討した。それらの議論をセミナー報告書としてまとめた。

4. 「保育実習指導のミニマムスタンダード」編集への参画

保育士養成における保育実習と保育実習指導の内容及び方法、到達点を保育士養成校間で、そし

て実習受け入れ施設の保育士とも共有することを目指して、ミニмумスタンダードを作成した。平成30年6月、中央法規出版から刊行予定である。本学科の実習指導も例として紹介した。今後は、このミニмумスタンダードを用いて、学科の教員間の学習や実習指導の向上に活用していきたい。

本報告書作成担当者 所属・氏名	連絡先内線番号
幼児教育学科 上垣内伸子	342